

ぴかぴかのくつした

太田陽翔

ぼくと兄ちゃんはやきゆうクラブに入っている。毎週土日の午後一時から六時まで練習するが、ぼくたちはいつもどろだらけになる。ぼくたちが練習から帰ると、お母さんは「おかえり！ はいはい、とにかくまっすぐお風呂場へ。」と言いながら、ぼくたちをでむかえてくれ、そのままお風呂場へ連れていく。Tシャツをぬぐうと「できるだけそつとね。」と言う。ベルトを外すと、「ゆかにおかないでかして。」と、ぼくたちからうけとる。ズボンやくつ下をぬぐうとすると「そつとね！ できるだけそつとぬいでここに入れて。」と「つ一つ一つ言う。ぼくたちが全部ぬいでシャワーをしていると、「くつさー！ はながまがる！」というお母さんの声が聞こえてくる。

シャワーをし終えてつだい場に出ると、土でよごれたズボンやくつ下を、お母さんは青い石けんであらっていた。ぼくが「その青い石けん何？」ときくと「せんたくきだけじゃ土のよごれがおちないから、この石けんですすっておとすんだよ。」と教えてくれた。

手洗いが終わるとせんたくきに入れ、今どはアツプシューズとスパイクのなかじきをもつてくる。「くつがとけないのがふしぎ。」ということばは、お母さんの口ぐせだ。

「穴が：。」ぼくたちのせんたく物をほしながらお母さんが小さな声で言った。見てみると、練習ズボンのひざの所が切れて穴があいていた。お母さんのことばをきいた兄

ちゃんが「お母さんごめんね。」と言った。「え？ ああ、別にこんなのぬえばいいんだけど、けがするといけなかつたなと思って。」と言った。ほくもそれを見ていて「お母さん、いつもくさいくつ下を洗ってくれてありがとう。」と言った。お母さんは目を大きくしてわらいながら「ほんとだよ！ くつ下がとけそうなくらいくさいんだから！」と言った。ほくが「なんだよー。うるさいなー。」と言うと「だって、こんなにくさくなるくらい、あせをかいて走っているんだなーって思ったんだもん。」と言った。そしてほくたちを見て「ズボンが切れるのも、くさいのも、それだけ二人ががんばっているってことでしょ？ もっとよごしてもいいし、くさくなくてもいいから、思いっきりやっておいで！」とえがおで言ってくれた。

ズボンが切れていても、くつやくつ下がくさくてきたなくても、お母さんはいつもきれいに洗ってくれる。そして、次にほくがはいたりする時は、きれいになっていて、いいにおいがするくつ下になっている。穴のあいたひぎの所も、ちゃんとふさがっている。

ほくと兄ちゃんが、大好きなやきゅうを思いきりできるのは、お母さんががんばってせんたくしてくれたり、ズボンをなおしてくれているからだわかった。これからもつとやきゅうをがんばりたいから、もっとよごしてくさくなくなるから、せんたくをよろしくね、お母さん。いつもありがとう。

評価のポイント

表現が難しいにおいについてしっかり描写している。心がほっこりする作品。